

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：82611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04485

研究課題名（和文）重症精神障害者を対象としたアウトリーチ支援における認知行動療法の効果検討と普及

研究課題名（英文）Effects of cognitive behavior therapy offered by assertive community treatment team- a randomized control trial-

研究代表者

佐藤 さやか（Sato, Sayaka）

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所 地域・司法精神医療研究部・室長

研究者番号：20450603

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はACTチームによるCBTの効果についてRCTデザインを用いて医療経済的側面を含めた包括的分析を行うことであった。分析の結果、社会的機能に加え、主観的不安感、他者評価不安について介入群にのみ有意な改善があった。「不安によって日常生活上支障のある行動」の頻度も介入群のみ有意に改善していた。利用者1人あたりにかかる医療費、障害福祉サービス費および訪問回数について対照群と比べて介入群のほうがかかる費用が低く、訪問回数も少なかった。以上の検討からACTチームによるCBT提供は利用者の臨床像や生活課題を改善することに加え、医療費や障害福祉サービス費用を抑えられることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際的にも多くない重症精神障害者へのアウトリーチ支援におけるCBTの効果検討をエビデンスレベルの高いRCTデザインで実施し、臨床的にも医療経済的にもポジティブな結果を得ることができた点において学術的意義があった。また公認心理師制度下において一層チーム支援への貢献が期待される心理職が近接諸領域の対人援助職に行うべきコンサルテーションのモデルを提示することができた点、我が国からエビデンスを発信することで、国内の臨床心理学領域のRCT研究および医療経済研究の活性化に資することができた点において一定の社会的意義を果たした。

研究成果の概要（英文）：The study aimed to conduct a comprehensive analysis of the effects of CBT by the ACT team, including aspects of the healthcare economy, using an RCT design. The analysis results showed that there were significant improvements in subjective anxiety and fear of negative evaluation by others only in the intervention group in addition to social functioning. Furthermore, the frequency of 'behaviour disturbed by anxiety in daily life' also improved significantly in the intervention group. The intervention group had lower health and disability social service costs and fewer visits per user than the control group. These results suggest that the provision of CBT by the ACT team can reduce healthcare and social service costs and improve the clinical profile and life challenges of users.

研究分野：臨床心理学

キーワード：認知行動療法 ACT 統合失調症 臨床心理地域援助 地域精神保健 精神科リハビリテーション 地域ケア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

我が国の精神科医療において訪問（アウトリーチ）支援が重点課題となって久しい。

欧米においては1970年代には脱施設化が完了しており、アウトリーチを含めた地域生活支援に関するシステムや技法がさまざまに検討され、公的な精神保健医療福祉システムの中に位置づけられている[1]。他方、我が国においては2004年に発表された「精神保健福祉の改革ビジョン」(厚生労働省, 2004)以降、「『入院中心』から『地域中心』の精神保健医療福祉」のための公的なシステム作りが始まり、平成26年4月の診療報酬改定で精神科重症患者早期集中支援管理料や精神科訪問看護における精神科複数回訪問加算の新設がなされるなど、入院を前提としない精神科医療が理念だけでなく国の制度としてようやく具現化されつつある。

地域生活支援を行うためのシステム作りが進み、「(病院や施設内ではなく)地域で支援すること」が当たり前になるうとする中で、次なる課題として挙げられるのは地域でどのような支援を実施するのか、またそのためにスタッフにどのようなスキルが求められるのか、という点である。

海外においては上記の問いに対する示唆の1つとして包括的地域生活支援(Assertive Community Treatment: ACT)において認知行動療法(Cognitive Behavioral Therapy: 以下CBT)の実施を模索する試みが複数みられるようになってきている。

ACTとは重い精神障害をもつ人(Severe Mental Illness: SMI、統合失調症、双極性障害、再発を繰り返す大うつ病を指す)を対象としたケアマネジメントの一類型であり、保健・医療・福祉にわたる包括的なケアを、多職種のチームアプローチで集中的に提供する援助方法である[3]。統合失調症に関する国際的な治療および支援の指針の1つであるThe Schizophrenia Patient Outcomes Research Team (PORT)でも有効な心理社会的支援の1つに挙げられており、アウトリーチによるクライアントの生活の場での支援が基本となっている。

ACTの枠組みで提供される支援技法としては、心理教育など再発予防等にエビデンスのあるプログラムが専門家の合意(Experts Consensus)として推奨されているが、近年、支援内容や質、実行可能性について実証的な研究が行われている。先行研究として認知行動療法との組み合わせに関する効果検討研究も含まれている。しかし我が国においてはこうした取り組みはほとんど見られない。

## 2. 研究の目的

我が国においてACTの支援過程で認知行動療法を提供し、その効果を検討する。

## 3. 研究の方法

本研究はクラスターRCTデザインによる介入研究であった。ACT全国ネットワークを通じてACT志向のアウトリーチ支援を実践する15チームをランダムに2群に分け、8チームを介入群、7チームを対照群とし、それぞれ対象者をリクルートした。対象者の導入基準は「不安を中核とする症状、問題」で日常生活上の支障があるとスタッフが判断したものである。介入群50名(平均年齢45.11±9.93歳)、対照群44名(平均年齢42.16±11.56歳)が研究に参加した。介入群はスタッフを対象にCBTに関する研修および継続的なスーパーバイズを提供し、通常のACT支援に付加してスタッフ自身が利用者にCBTを実施、対照群は通常のACT支援のみを実施した。効果指標として利用者関連では、Brief Psychiatric Rating Scale 日本語版、新版 STAI 状態-特性不安検査、Global assessment of functioning、World Health Organization Quality of Life 26、日本語版 24項目版 Recovery Assessment Scale (RAS)、日本版クライアントサービス受給票:改訂版、研究期間中の利用者-スタッフコンタクト数、就労の有無(就労日数・就労期間)、悪化・再入院の有無を収集した。またスタッフ関連ではケア負担感尺度、バーンアウト尺度、一般健康調査票(General Health Questionnaire: GHQ)12項目版、Cognitive Therapy Rating Scale 日本語版を収集した。評価時点はベースライン時、ベースラインから4か月後、12か月後、18か月後であった。

## 4. 研究成果

Mixed-effects models for repeated measures (MMRM)による分析を行った結果、社会的機能に加え、プライマリアウトカムである主観的不安感(STAI: B=-8.67, 95%信頼区間-12.41--4.93, p=0.000)、他者評価不安(FNE: B=-4.19, 95%信頼区間-7.59-0.80, p=0.020)について介入群にのみ有意な改善があった。RASで測定したリカバリーの程度およびWHO-QOLで測定した社会的関係と環境領域についても同様であった。「不安によって日常生活上支障のある行動」の頻度も介入群のみ有意に改善していた。利用者1人あたりにかかる医療費、障害福祉サービス費および訪問回数について対照群と比べて介入群のほうがかかる費用が低く、訪問回数も少なかった。以上の検討からACTチームのような多職種アウトリーチチームによるCBT提供は利用者の臨床像や生活上の課題を改善することに加え、医療費や障害福祉サービス費用を抑えられることが示唆された。

本研究の実施により、重症精神障害者へのアウトリーチ支援におけるCBTの効果検討をエビ

デンスレベルの高い **RCT** デザインで実施できたことは国際的にも貴重な機会であった。また、公認心理師制度が創設され、一層チーム支援への貢献が期待される心理職が近接諸領域の対人援助職に行うべきコンサルテーションのモデルを提示することができたことをは有意義であったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yasuma Naonori, Sato Sayaka, Yamaguchi Sosei, Matsunaga Asami, Shiozawa Takuma, Tachimori Hisateru, Watanabe Kazuhiro, Imamura Kotaro, Nishi Daisuke, Fujii Chiyo, Kawakami Norito	4. 巻 10
2. 論文標題 Effects of brief family psychoeducation for caregivers of people with schizophrenia in Japan provided by visiting nurses: protocol for a cluster randomised controlled trial	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BMJ Open	6. 最初と最後の頁 e034425 ~ e034425
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1136/bmjopen-2019-034425	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤さやか	4. 巻 19(3)
2. 論文標題 福祉領域におけるスーパーヴィジョン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 316-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤さやか	4. 巻 増刊第6号
2. 論文標題 地域医療・介入のケースフォーミュレーション	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 70-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤さやか	4. 巻 11
2. 論文標題 アウトリーチチームにおけるCBTp-ACTチームとの共同-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 認知療法研究	6. 最初と最後の頁 138-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤さやか	4. 巻 106
2. 論文標題 公認心理師のための職場地図「アウトリーチ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 455-456
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 佐藤さやか
2. 発表標題 生活技能訓練療法と公認心理師
3. 学会等名 第20回&日本認知療法・認知行動療法学会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sato S, Ogawa M, Matsunaga A, Mizuno M, Yamaguchi S, Kikuchi A, Fujii C
2. 発表標題 Effects and costs of cognitive behavioral therapy provided by assertive community treatment teams in Japan: a cluster randomized controlled trial.
3. 学会等名 14th World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤さやか
2. 発表標題 ACTチームと取り組むCBT-RCT studyによる知見から
3. 学会等名 第14回日本うつ病学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤さやか, 佐藤朋恵, 富沢明美, 藤井千代
2. 発表標題 アウトリーチにおけるCBTp-ACTチームとの共同-
3. 学会等名 第17回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 子安 増生、丹野 義彦、箱田 裕司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 1002
3. 書名 有斐閣 現代心理学辞典 「アウトリーチ」他12項目	

1. 著者名 佐藤さやか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 アウトリーチ（訪問）支援におけるCBTp 不安感からくる生活上の困難をもつケースへの支援．石垣琢磨，菊池安希子，松本和紀他（編著） 事例で学ぶ統合失調症のための認知行動療法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤井 千代  (Fujii Chiyo)  (00513178)	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所 地域・司法精神医療研究部・部長   (82611)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------